

# 不登校支援を行う教師に対する ティーチャー・トレーニングの実施報告

櫻井恵子・生田周二（奈良教育大学 EDS・SDGs センター）  
櫻井裕子（奈良教育大学 教育連携講座）  
中山留美子（奈良教育大学 学校教育講座）  
石川元美・大谷陽子（奈良教育大学附属小学校）

The Practice report for Teacher Training for Teachers engaged in Support for non-attending students

Keiko SAKURAI, Shuji IKUTA  
(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)  
Yuko SAKURAI  
(Department of Educational Cooperation, Nara University of Education)  
Rumiko NAKAYAMA  
(Department of School Education, Nara University of Education)  
Motomi ISHIKAWA, Yoko OHTANI  
(Elementary School attached to Nara University of Education)

**要旨：**本稿は、不登校の子どもを支援している教職員の情緒的安定やスキルアップ、不登校の子ども理解についての知識を高めるために行った、ティーチャー・トレーニングセミナーの実践報告である。本実践を行った結果、TTのスキルを学び、不登校の子どもへの具体的な対応方法を知ることによって教職員の自信と情緒の安定につながると共に、不登校対応に対する積極的な姿勢につながっていたことが参加者によって語られた。また、教員がTTのスキルを使用して対応することで、子どもや保護者との関係が改善し、それが学校復帰につながっていたことも語られた。

**キーワード：**不登校 Non-attending student at school  
教師支援 Teacher support  
ティーチャー・トレーニング Teacher training

## 1. はじめに

ティーチャー・トレーニング（以下 TT）は、アメリカの UCLA において、AD/HD 等の発達障害の子ども達の保護者を対象として開発されたペアレント・トレーニング（以下 PT）が、学校や保育の現場で発達障害の子どもへの対応にあたる教職員用に改訂されたものである（河内・楠田・福田,2016）。PT は、発達障害の子どもへの行動変容のためのプログラムを、子ども本人ではなく、その保護者に実施することを特徴としているが（岩坂,2012）、発達障害を持つ子どもの保護者だけでなく、TTとして学校や保育の現場に適用することができ、発達障害の子どものみならず、定型発達の子どものみならず、効果があると報告されている（今西・川西・玉村,2014）。また、教師や保育士のスキルアップや自信度、子どもへの理解度の向上だけでなく、子どもとの関係性の安定化や学級全体の良好な運営につながるとの報告もあり（岩

坂・池島・小野・久松,2005）（今西・川西・玉村,2014）、子どもの自尊感情の低下を防ぐとともに、子ども自身の対人関係の広がりを促進する可能性も示唆されている（大西・武藤・岩坂,2015）。

さらに、前述したように PT はもともとは発達障害の子どもへの保護者のために開発されたものではあるが、肥後・前野（2019）の研究によると、PT は不登校の子どもを持つ保護者の養育態度を改善し、子ども理解をうながして親子間の関係を安定化させ、結果的に子どもの学校復帰につながるとのことである。また、櫻井・櫻井・生田（2022）の研究によると PT に参加した保護者の精神的安定や子育て、子どもの不登校という問題に前向きに対応していこうとする変化が得られたとの報告もある。そのため、PT をもとにした TT もまた不登校の子どもと関わる教職員に適用することができれば、PT と同様の効果をもたらすのではないかと考えられる。

そこで本実践の目的は、不登校の子どもに関わる教職員や支援サポーターの大学生を対象として TT を実施し、

彼らの情緒的安定や、PT・TTのスキル習得をはかることである。また本研究の間接的な成果として、子どもと教職員の関係、そして教職員と保護者との関係の改善につなげ、子どもの学校復帰・教室復帰に寄与する事が期待できるのではないかと考える。

近年、不登校の小中学生の数は増加の一途をたどり、2021年度には244,942人を数えるまでになっており、不登校問題は学校教育分野における大きな課題の一つとなっている。そのような中、不登校対応に苦慮し、無力感を感じる教師も少なくはなく(網谷,2001)、不登校の生徒や、休みがちな生徒と上手く関われないなど、生徒への抵抗感や教師としての自信のなさなどの悩みをかかえていることが明らかにされている(都丸・庄司,2005)。現状、不登校対応は子どもの在籍校、特に担任教師が主体となって行われることが多い。そのため、不登校対応を行う教員のスキルや子ども理解についての知識を高めるとともに、彼らの精神的安定をはかることは、不登校の子ども支援に資するものになるのではないかと考える。

## 2. 実践の概要

### 2.1. 支援実践の目的

奈良教育大学では、大学構内の民家風の施設(寧楽館)を利用し、不登校の子どものための居場所支援(以下居場所「ねいらく」)を行っている。ここでは、子ども本人のサポートを行うとともに、その家族や不登校の子どもを支援する教職員などの支援者へのサポートを行うことを目的として、公認心理師・学校心理士による教育相談等も行っている(櫻井・櫻井・生田,2021)。本実践は、この居場所「ねいらく」が中心となって県内の不登校児を担当している教職員へのTTの研修支援を行い、学校内外での当該児童生徒への対応の改善および教職員の精神的安定をはかることを目的としている。

### 2.2. 支援の対象

本実践における支援の対象は、小学校教員(男6・女11)、中学校教員(男4・女7)、高等学校教員(男1)、適応指導教室支援員(女1)、フリースクール支援員(女1)、児童発達支援センター保育士(女2) 保育所保育士(女2) 大学特任教授(女1)の計36人である。奈良県内勤務者(35人)と大阪府内勤務者(1人)である。

### 2.3. 支援の内容

本実践におけるTTは、不登校対応を行っている教職員を対象としているため、『奈良式』のPTに含まれているスキル習得の他に、居場所や自尊感情など不登校の子ども理解に関する知識習得のための講義を加えて実施した。研修は3講座で構成されており、各講座はそれぞれ90分であった。また、各講座の内容は以下に示し

たとおりである。

表1 不登校生徒支援の教師のティーチャー・トレーニング内容

1 講座	居場所と対話・自尊感情に関する理解
2 講座	TTの基礎・CCQ(効果的な指示の出し方) 行動の三分類(好ましい行動を増やす)
3 講座	好ましくない行動への対応方法・ABC理論ブ ロークンレコード・リフレーミング

第1講座は、主に不登校の子ども理解に関する知識に関するものであり、三部構成(①不登校:問題把握の変容……「特定の子」から「どの子ども」、②居場所「ねいらく」、③ケースを扱うときの視点)で展開した。

①では、不登校・ひきこもり支援の広がりの中で、家庭、学校とは異なったアプローチで、「子どもから大人への移行を支援」する枠組みである「第三の領域」が必要となってきている点を説明した。「第三の領域」は、「すべての子ども若者の主体的な活動の場」であるとともに、不登校やひきこもりの支援を含め「課題に向き合い支援する取り組みの場」でもある。そうした場における自尊感情との関係性についても解説した。

②では具体例として、奈良教育大学で行っている不登校支援の「居場所ねいらく」について説明した。子どもと保護者の「心のエネルギー」の充電と、共感とつながりを大切に作る場の提供を行っている。

③では、具体的な事例についてエコマップを使って検討した。個人とそれを取り巻く環境(学校、家庭、地域など)との関係性、子ども・保護者の状況把握、「問題」の把握、地域の社会資源(居場所、福祉関係機関・団体など)を活用した「問題」対応の方法などの検討である。

そして、第2講座、第3講座ではTTの基礎知識やCCQ<sup>1</sup>、ブロークンレコードのスキルなど、基本的なPTのスキルの習得がはかられた。

### 2.4. 調査の方法

本実践の効果を調べるために、参加者にはTTの受講後にTTが自身の心理的状态と教育活動にどのような影響を与えたかについての研修後のアンケート調査(記名)を行った。アンケートの項目は、①TTを知っていたか、②TTへの参加理由、③TTのテクニックの行動の三分類は学校場面で使えると思うかどうか、④TTのテクニックの『ほめる』を使うとそれは『甘やかし』になると考えるかどうか、⑤CCQのテクニックを使ってみようかどうか、⑥TTを受ける前は、不登校の子どもが学校に戻ってくるためには何が必要だと考えていたか、⑦TTを受けて考えが変わったところはどこか、の7項目であった。

また、TTを受けた2名の教員(A:小学校教員、B:

中学校教員) に対してインタビュー調査も行った。インタビューは TT 受講の約 2 か月後に行われ、① TT 受講後の実際の教育現場における自身の心理的状況、② TT 受講後の実際の教育活動、③ TT 受講後の自身の学級の子どもや保護者との関係、④ TT 受講後の学級の様子を半構造化面接の対面形式で行われた。インタビュー時間は、それぞれ 1 時間程度であった。

### 3. 結果

まずアンケート調査では、参加者の約半数が TT への参加理由として、「不登校の児童生徒を担当し、どうしてもよいか分からず、悩みを抱えている」「子どもへの指導方法に悩んでいる」「ほめよう、ほめようと思ってもどうほめて良いのか分からない」「職場で不登校生徒の事で意見が合わずうまくいかないことがあって悩んでいた」という理由をあげており、本セミナーに参加した教職員の多くが不登校対応における悩みや不安感を持っていることがわかった。中でも、担任や養護教諭の悩みは深く、「不登校の生徒が保健室に来るが、(その対応が) 苦しくて辛いので来た」という教職員もいた。他にも「今まで不登校の生徒や保護者に感覚的に支援していることが多かったので、きちんと理論を学んで活かしたい」「不登校担当の職務についてので、校内の環境を整えたい」「自分が変わると子どもが変わると思うので、自分の関わり方を変えたい」という参加理由も見られた。

また、TT の理論や居場所・対話・自尊感情についての研修を受けたことにより、今までの自身の考えと変わった事はどんなところか尋ねたところ、「不登校の子どもたちへの対応として、理論を持って対応しよう」「不登校以外の子どもに対しても使えるテクニックである」と TT のテクニックを積極的に使いたいという自身の変化についての回答が得られた。他にも、「発達障害の子どもたちの二次障害による不登校を予防しなければいけない」「不登校の子どもたちには何かさせないと子どもが困るという考え方を持っていたが、まずは安心できる居場所、自己決定できること、心のエネルギーをためられるように関わりを持つことが大切」「大人の心がけ一つで子どもの今後を変えるのかと思うと怖い反面、希望が持てる」というように自身の教育活動における考えの変化や、「感情的にならずにほめることで自尊感情を高めたい」「言葉かけで、子どもたちの居場所が出来る」等、自尊感情・居場所感を意識する回答も得られた。

インタビュー調査では TT 受講前後の自身の気持ちや不登校対応の変化について以下のように語られた。

#### A (小学校教員)

今まで、今まで不登校支援で上手くいかなかったことを経験していたので、どのようにしたら良いのか分からなかったが、TT 研修会受講後、家庭訪問で、保護者の

話を受容的に聞き、特に保護者との関係作りに力を注いだ。そして、子どもをほめてもらうように提案し、自身の家庭訪問では、子どもと遊んで CCQ のスキルを使ってほめて信頼関係を構築するようにした。その結果、2 学期登校するようになってきた子どもが、家に帰りたいたか保健室に行きたいと言ったら、頑張らせずにそのようにさせた。また、学級では、TT のスキルを使って接したので、機嫌よく登校するようになった。不登校はどのように接したらよいか分からないことや不安なことが多かったが、TT 受講後は、悩むことなく保護者と話したり、子どもと遊んだりほめたりすることができ、安心した教育活動が出来た。

#### B (中学校教員)

今まで不登校の生徒をどのようにしたら学校に来させられるだろうかと迷いながらやって来ていた。来させることばかり考えていたが、TT を受けてから、無理をさせなくても良いと心に迷いなく保護者と子どもに対応することが出来るようになった。先ず保護者支援だと思い、保護者に PT の手法で子どもをほめたり、会話を楽しんだりすることを提案してみたところ、親子の会話が増え関係が良くなって来ている。そんな親子の状態を経て、全休だった子どもが週 1 回登校するようになってきたので、TT の手法の CCQ を使ってほめたり、話したりしたところ会話が弾み笑顔が見られるようになってきた。今まで、不登校だった子どもが登校し始めるということを経験したことが無かったので、TT の効果を感じる。また、TT の時ロールプレイ (以下 RP) でスキルを教えてもらったので、客観的に指導の実際について理解できた。RT でやってもらったスキルは、そのまま教室で実践できる場面が多く、指示が通りやすく、子どもとの関係もよくなってきている。研修会ではとても得るものが多く、悩みが少なくなったと感じている。

A と B へのインタビューでは、共に TT を受講後には不登校の児童生徒に対応する際の悩みや迷い、何をしたらよいか分からないといったことが減り、こうやって良いのだと自信を持って支援できるようになってきたことや、保護者支援も意識するようになったことが語られた。また、彼らは子どもとの関係の改善を感じており、A は 1 学期には 38 日の欠席であった児童が、2 学期には 5 日の欠席になり、TT の実践が子どもの学校復帰につながっていると語った。

### 4. まとめと今後の課題

本実践を行った結果、不登校対応に携わる教職員は、必ずしも自身の支援に自信を持って行っているわけではないことが分かった。多くの場合教職員は、学校復帰には学習支援を通して学習の遅れを取り戻したり、子ども



の友人関係を良くしたり、母子分離をしたりすることが必要だと考えがちである。そしてそれと同時に、これで良いのだろうかという悩みや迷いも抱えている。しかし、TT受講後のアンケート調査やインタビュー調査からは、習得したPT・TTのスキルを使用しようとしたり、自尊心や居場所感を意識して対応しようとしたりする意欲や希望が語られていた。このことは、TTが、それを受講した教職員たちが抱える悩みに対して不登校の子ども理解に関する知識や技法といった一定の解答を提示し、不安や迷いを払拭したからではないだろうか。また、AやBはインタビュー調査に対して、実際に自らが支援する子どもに対してCCQ等のスキルを使用し、その結果子どもの欠席が減ったり会話がはずんだり笑顔が見られるようになったと語っている。このような具体的に観察できる成果は、彼らの安心感や行った支援に自信と手ごたえを感じさせることにつながっただろう。

さらに、AとBは共に保護者に対してどのように子どもに対応したらよいかについてTTのスキルの使用を提案している。この提案によって、子どもの不登校に対する理解や対応方法に教員と保護者双方に一貫性を保つことや、教員と保護者が密に連携をとることで保護者との関係改善につながったのではないだろうかと考える。さらに、このように他者に支援方法を提案するという行為は、教員自身の自信のあらわれであろうとも考えられる。

以上のことから、TTは発達障害の子どもの対応を行う教師向けにPTを改訂したものであるが、PTが不登校の子どもの保護者の養育態度や子どもとの関係の改善、精神的安定や子育て、子どもの不登校という問題に前向きに対応していこうとする変化に有効であったように、PTもまた不登校対応を行う教職員の情緒安定や不登校対応に対する積極的な姿勢につながったと考えてよいのではないだろうか。TTの要素を多くの教職員等に活用してもらうために効果的な一つの手段であると考えられる。

最後に、通常PTやTTを実施する場合には、数カ月にわたって少人数での繰り返しのセッションが行われる。しかし、本実践で実施したプログラムは一回のワークショップで多数を対象とした取り組みであったため、TTによってもたらされた変化が長期的に持続するかどうかについては検証できていない。そのため、今後はTTを長期的に実施して効果の持続について検証したり、TT終了後のフォローアップについても検討したりする必要がある。

## 注

- 1) CCQは、Calm Close Quietの略語である。C(Calm)は、穏やかな声で、C(Close)は、近くで、Q(Quiet)は、静かに声掛けをするテクニックのことである。

## 引用文献

- 網谷綾香(2001)「不登校児と関わる教師の苦悩と成長の様相」,カウンセリング研究,34(2),pp.160-166.
- 今西満子・川西光栄子・玉村公二彦(2014),「学級経営・生徒指導に活かすティーチャー・トレーニングの試み」,教育実践開発研究センター研究紀要,23,pp.219-225.
- 岩坂英巳・池島徳大・小野昌彦・久松節子(2005),「学校現場におけるペアレント・トレーニングの教師版の試み」,教育実践総合センター研究紀要,14,pp.141-145.
- 岩坂英巳(2012),奈良教育大学特別支援教育研究センター編『困っている子をほめて育てるペアレント・トレーニングガイドブックー活用のポイントと実践例ー』,じほう.
- 大西貴子・武藤葉子・岩坂英巳(2015),「ティーチャー・トレーニング・プログラムによる保育者支援に関する研究 第一報」,奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要,1,pp.83-90.
- 河内美恵・楠田絵美・福田英子(2016),保育士・教師のためのティーチャーズ・トレーニングー発達障害のある子への効果的な対応を学ぶー(上林康子監修),中央法規.
- 櫻井裕子・櫻井恵子・生田周二他(2021),「居場所「ねいらく」における不登校支援の一環としての保護者支援の実践研究」,次世代教員養成センター研究紀要,第7号,pp.221-224.
- 櫻井裕子・櫻井恵子・生田周二他(2022),「不登校の子どもを育てる保護者へのペアレント・トレーニングの実施効果ー対面とオンラインのハイブリッド方式による実施報告ー」,次世代教員養成センター紀要,第8号,pp.157-160.
- 都丸けい子・庄司一子(2005),「生徒との人間関係における中学校教師の悩みと変容に関する研究」,教育心理学研究,53,pp.467-478.
- 肥後祥治・前野明子(2019),「思春期・不登校状態の子どもの子育てに悩む保護者に対するペアレントトレーニング実施の効果」,鹿児島大学教育学部研究紀要教育科学編,70,pp.105-114.